

第三編

植物と動物

第一章 植物

第一節 植生

1 鹿児島県本土の植生

鹿児島県本土では海拔一七〇〇・三の韓国岳が最高点である。

鹿児島県本土では自然植生としては海拔一〇〇〇以上あたりまではシイ類やカシ類などの常緑広葉樹を主とする照葉樹林によつて覆われている。海拔一〇〇〇以上を越すとブナやミズナラなどを主とする夏緑広葉樹林（落葉広葉樹林）になる。海拔一〇〇〇前後の高山地帯ではモミやツガ、アカマツなどの針葉樹も混生するようになってくる。山頂帯や稜線部にはミヤマキリシマやコバノミツバツツジなどのツツジ類を主とする風衝低木林や風衝草原が発達している。照葉樹林帯はまた、低海拔地帯のタブ林に続いてシイ林、シイ林からウラジロガシやアカガシなどのカシ林を経て山頂の風衝低木林へと垂直的に分布しているのが普通である。

照葉樹林帯における植生の組成をみると、海拔およそ一〇〇〇以下の低平な沿海地や谷沿いの適潤地にタブノキ、バクチノキ、シヨウベンノキ、モクダチバナなどの高木類やイズセンリョウ、センリョウ、ギョクシンカ、ハマビワなどの低木類、アオノクマタケラン、ノシラン、フウトウカズラ、イシカグマ、オオイワヒトデ、カツモウイノデ、ムサシアブミなどの草本類などによつて構成されるタブ群落が発達している。

続いてスダジイ、コジイ、マテバシイ、アラカシ、ヤブツバキ、カクレミノ、サカキ、タイミンタチバナ、ミミズバイ、クチナシ、クロキなどの高木類やヒサカキ、ハクサンボク、クチナシ、マンリョウ、シャリンバイ、ネズミモチ、イヌガシなどの低木類、マルバベニシダ、コバノカナワラビ、ヤブコウジ、テイカカズラ、フウトウカズラ、ヤブランなどの草本類を主とするシイ群落が発達している。

その上位にはウラジロガシ林やアカガシ林が発達している。高木類にはウラジロガシやアカガシの他にイスノキ、タブノキ、ホソバタブ、バリバリノキ、コジイ、サンゴジュなどが生育している。低木類にはアオキ、ハイノキ、シキミ、ミヤマシキミ、ヒサカキ、サザンカ、ミヤマトベラなどが優占し、草本類にはミヤマノコギリシダ、キジョラン、ミヤマトベラ、フユイチゴ、シシガシラなどが生育している。

高木林の上限付近になるとモミやツガの混生する樹林となつている林分が多い。モミやツガの混生する樹林の上位は山頂帯や稜線帯で、ハイノキやシキミ、ミヤマシキミ、サザンカ、アセビ、イヌツゲ、コツクバネウツギ、ツクシドウダン、ミツバツツジ類などが混生する山頂性風衝低木林となつていることが多い。

ところが、このような自然状態の植生の見られるところは殆んど残っていない。山地樹林の多くは家屋や家財の用材として、また、薪炭材その他として利用されるため伐採されてきた。また、スギやヒノキなどの用材の植林をしたり、耕作地として開墾されたりして長い時間を経過してきているので、山林の多くが二次林や人工林となつているところが多い。特にタブ林やシイ林の発達する平地や低

山地における森林の破壊は著しい。わずかに社寺林や保安林、河川沿いの斜面などに断片的に残存しているに過ぎず、多くは代償植生（二次林）が持続群落として発達しているが多い。

郡山町の最高点は八重山の六七六・八¹で、山体部はタブ林やシイ林、マテバシイ林などの常緑広葉樹林、スギやヒノキなどの植林地やモウソウチク林などによって占められている。モミやツガなどの針葉樹の混生する山頂帯の樹林や山頂部の風衝低木林の発達は認められない。また、郡山町の多くは山間地で、耕作に適した平坦地は少ない。そのため、小河川沿いの狭い沖積地の多くは水田として利用されているが、乾田が多く、湿性植生の発達は良好とはいえない。畑地は山の斜面や丘陵地を利用しているが畑耕作地も多いとはいえない。

2 郡山町の植生

山地の植生

八重山

郡山町の北部に位置し、海拔五〇〇¹をこす稜線が東西約三キロ¹にわたって連なり、入来町との分水嶺をなしている。入来峠側の八重山公園からの登山道に沿って上っていくと、スタジイやユジイ、マテバシイ、ウラジログシ、イスノキ、アカガシ、ホソバタブ、カゴノキ、イチイガシ、カナクギノキ、バクチノキ、クロガネモチ、コバンモチ、カンザブロウノキ、クロバイ、クマノミズキなどが高木層を形成し、低木層にはヤツデ、アオキ、シラキ、ヒサカキ、ネ

ズミモチ、ハイノキ、イヌガシ、サザンカ、ルリミノキ、シキミ、ミヤマシキミ、ハナイカダ、ネジキ、コシヨウノキ、ミヤマトベラなどが生育し、カギカズラ、ウドカズラ、アオツツラフジ、マタタビ、ホウライカズラ、フウトウカズラなどのつる植物が生育している。

草本層にはナルコユリ、オモト、アケボノシユスラン、イチヤクソウ、ヒメウワバミソウ、キチジョウソウ、ツチトリモチなどが自生している。シダ類にはナチシダ、オオミツデ、ジュウモンジシダ、ナガバノイタチシダ、マツザカシダ、タニイヌワラビ、ヒロハノヤブツテツ、ハリガネワラビ、シラガシダ、ナチクジャクなどの自生が知られている。場所によってスタジイ優占群落となっている林分やマテバシイ優占群落となっている林分などがある。キチジョウソウは吉祥草で、かねてはなかなか花をつけないが、その家に吉事があると花を咲かせるといういわれによるという。ツチトリモチはハイノキ科植物、特にクロキの根に寄生する寄生植物である。登山道脇には炭焼き窯の跡が点在している。かつては炭焼きが盛んに行われていたことだろう。

稜線帯にはイスノキ、ウラジログシ、アカガシ、マテバシイなどが鬱蒼と繁る樹林を形成している。下層にはサザンカ、ヤブツバキ、イヌガシ、ハイノキ、ミヤマシキミなどが優占している。林床にはギンリョウソウが多い。ギンリョウソウはイチヤクソウ科の腐生植物で、深山の腐葉の堆積した森林の陰湿な環境に生える。葉緑素は全然存在せず、体全体が白色でろうそくのような感じで、植物体の形を竜に見たてて銀竜草また、ユウレイタケの名がある。北海道か

ら琉球まで広く分布する。

山頂には国土地理院の一等三角点があり、六七六・八が刻まれている。南に開けた展望台は頂上よりやや西に位置し、桜島や開聞岳などの眺望が楽しめる。甲突池への道路はモウソウチク林やスギ植林地となっており、階段は設けてあるが急坂である。

上宮岳

八重山の西に位置し、海拔五五一がである。山腹あたりの樹林は亜高木層に発達したコジイやマテバシイ、タブノキ、ヤブニツケイなどの常緑広葉樹が混生する二次林となっている。林内にはバリバリノキ、イヌカヤ、ネジキなどの樹木類やコヤブミヨウガ、サンショウソウ、ヤマトウバナ、エビネなどの草本類やキジノオシダ、オオカグマ、カツモウイノデ、シロヤマシダ、オオバノアマクサシダ、イワガネソウ、ハチジョウシダ、イヌワラビ、オニヤブソテツ、ヒロハノコギリシダ、オオバノイノモトソウ、イノデ、フモトシダなどのシダ類が生育している。

海拔五〇〇があたりから山頂帯になると、ウラジログシやイスノキ、マテバシイ、アカガシ、スダジイなどを主とする樹林となり、低木層にはミヤマシキミ、ハイノキ、アオキ、シキミ、サザンカなどが生育している。したがって原植生はアカガシ林やウラジログシ林、マテバシイ林などであったことが予想される。林床にはツチトリモチが自生している。ツチトリモチはツチトリモチ科に属し、葉緑素を持たず有機物を合成することができないので、ハイノキ科特ニクロキの根に寄生して生活している。

重平山

海拔五二三・一がで、郡山町・東市来町・伊集院町三町の町界をなしている山である。山体部の多くはスギ・ヒノキの植林によって覆われているが、バリバリノキ、バクチノキ、シロバイ、シヨウベンノキ、アオモジ、トキワガキ、タニワタリノキ、サンゴジュ、イワガネ、サツマルリミノキ、カギカズラ、ホウライカズラ、ハマニンドウ、トラノオスズカケなどの暖地性の植物やウラボシノコギリシダ、ナガサキシダ、オオハナワラビ、ナチクジャク、ヤリノホクリハラン、イワヤナギシダ、オオバノイノモトソウ、オオイワヒトデ、ホウビシダ、クリハランなどのシダ植物およびツチトリモチ、カキランなどが生育している。

山頂帯はマテバシイ、アカガシ、スダジイによって覆われ、部分的にマテバシイ優占群落やアカガシ優占群落となっている林分がある。低木層にはヤブツバキ、タブノキ、ネズミモチ、ヒサカキ、バクサンボク、ヤブニツケイ、ミヤマシキミ、サザンカ、クロキ、アオキ、イヌガシ、イズセンリヨウ、スダジイ、マテバシイなどが混生し、草本層にはツワブキ、キッコウハグマ、ヤブコウジ、テイカカズラ、アリドウス、ノコギリシダ、ハナミヨウガ、イナモリソウ、フユイチゴ、コヤブタバコ、コバノカナワラビ、ササクサなどが生育している。

花尾山

郡山町の東部に位置し、吉田町と境を接している標高五四〇・四がの山で、西麓には花尾神社が建立されている。神社草叢のスギ林は鬱蒼と生い茂り、神社の下斜面にはイチイガシの群生も見られる。

登山道の海拔四二〇mあたりまではスギやヒノキの植林地である。

続いてスダジイやタブノキ、ウラジロガシ、マテバシイ、ヤブツバキなどの常緑広葉樹とアオモジ、カラスザンショウ、ネムノキ、ゴンズイ、ハゼノキ、クリノキなどの落葉広葉樹が混生する二次林が発達している。海拔四八〇mあたりにはスダジイ、タブノキ、マテバシイを主とするスダジイ林が見られ、海拔五三五mあたりにはアカガシ林が発達している。林内にはヒサカキ、ハクサンボク、ネズミモチ、ヤブツバキ、アオキ、イズセンリョウ、シキミ、ヒメアリドウシなどの常緑樹やキブシ、ハナイカダ、ハドノキなどの落葉樹、サツマイナモリ、ヤマアイ、トキワヤブハギ、ツルコウジ、キチジョウソウ、ハナミョウガ、コゴメスゲなどの草本類やマルバベニシダ、ホソバカナワラビ、ヤマイタチシダなどのシダ類などの生育が見られる。

山頂帯は人手によって攪乱されていて自然状態の植生は見られないが、イスノキ、スダジイ、マテバシイなどの高木類、ミヤマシキミ、シキミ、ハクサンボク、アオキ、サカキなどの低木類の状態からイスノキやアカガシ、マテバシイなどを主とする常緑広葉樹林であったことがうかがえる。

三重岳

海拔四八六・一mで、郡山町の東部に位置し、鹿児島市皆与志町及び吉田町と境を接している。自然遊歩道にも指定されている。登山道に沿ってクマノミズキ、ハマセンダン、エゴノキ、ヤマザクラなどの落葉広葉樹やクロキ、クロガネモチ、スダジイなどの常緑広葉樹の混生する亜高木状の樹林やスギの植林がある。低木層にはカ

シノノキ、イヌビワ、コンテリギ、トベラ、ノイバラなどが生育し、下草にはコゴメスゲ、エダウチチヂミザサ、コバノタツナミソウ、ヤブラン、サツマイナモリ、フユイチゴ、クサイチゴ、ガンクビソウやシダ類のミゾシダ、ホシダ、フモトシダ、ノコギリシダ、ベニシダなどが見られる。

山頂近くの斜面にはマテバシイやタブノキを主とする二次林が発達している。以前にスギやヒノキの植林をした後放置されたものようである。林内にはマテバシイやタブノキの他に常緑性のヤブニッケイ、コジイ、カクレミノ、ミミズバイなどの高木類やハクサンボク、アオキ、ヤブツバキ、シヤシヤンポ、ネズミモチ、ミヤマシキミ、コシヨウノキ、シキミ、イヌガシ、ヤツデ、ヒサカキ、ヤマツツジ、ツルグミなどの低木類、ヤマザクラ、クリノキ、コナラ、リンボクなどの落葉樹が混生している。下草にはフユイチゴ、ヤブコウジ、ハナミョウガ、コゴメスゲ、ジャノヒゲ、ツワブキ、アリドウシ、シュンラン、ヤブラン、キダチイナモリ、サイゴクベニシダ、ノコギリシダ、フモトシダ、ウラジロなどが生育している。山頂部は伐採されていて展望がよい。

山地の植物群落

タブノキ優占群落

タブノキはクスノキ科に属する常緑の高木である。常緑広葉樹林を構成する主要な樹木の一つで、本州・四国・九州・琉球・朝鮮半島南部に分布している。海岸沿いの平地や低山地にバクチノキ、シヨウベンノキ、サンゴジュ、ハマビワ、ヤブニッケイなどの高木類、

イズセンリョウ、ヤツデ、アオキなどの低木類、ノシラン、フウトウカズラ、イシカグマ、オオイワヒトデ、カツモウイノデなどの草本類などを主な構成種とする群落を作っている。最も南方暖地的色彩の強い群落である。

タブノキ群落の成立する低平で適潤な富栄養地は、古くから耕作地や住宅地として開発されてきている。しかもシラス地帯では侵蝕されて崖地となつていくところが多く、タブノキ群落の発達する適地とはいえない。したがって、タブノキ群落の残存林は極めて限られ、断片的にしか認めることはできない。鹿児島県におけるタブノキ群落は植生学的にはムサシアブミータブノキ群集に含まれている。

郡山町内においてはタブノキの優占する林分が各地に断片的に認められるが、タブノキ群集の標徴種（群集を特徴づける種）や区分種（群集を区分する種）となるバクチノキ、アオノクマタケラン、ハマビワ、オオイワヒトデなどの種類が認められない。したがって、タブノキ優占群落としておく。

シイ群落

シイノキにはスタジイ（イタジイ）とツブラジイ（コジイ）の二種類がある。スタジイは沿海地と内陸部の山地に、ツブラジイは内陸部の丘陵地に棲み分けて分布する傾向がある。

シイ群落は日本列島の沖縄諸島から西南日本の沿海低山地帯に広く分布している最も主要な群落の一つである。すなわち、常緑広葉樹林（照葉樹林）帯で最も広い面積を占めているのがシイ林であり、常緑広葉樹林を代表する群落ともいうべき存在である。シイ群落はその成立する地域によってシイ群落を構成する植物の種類に違いが

ある。そのため、同じシイ群落であっても地域によって質的に相違が認められる。九州南部地方の自然植生としてのシイ群落はミミズバイ、オガタマノキ、ヤマビワ、ヤマモモ、ミサオノキ、ルリミノキ、イチイガシ、センリョウなどの種類によって特徴づけられるミミズバイースタジイ群集（群落）にまとめられていて、他の地域に発達するシイ群落と区別されている。

また、同じ地域内であっても、自然林が一度伐採された跡に発達するシイ群落は、群落を構成する植物の種類に相違を生じて来るので、群落としては違った類型にまとめられることになる。九州南部地方のシイ群落はミミズバイースタジイ群集（群落）としてまとめられている。高木層はスタジイ、マテバシイ、タブノキ、イスノキ、コバンモチ、ホルトノキ、ヤブニツケイ、ヤブツバキ、サカキなどの樹種が優占的に生育し、低木層にはヒサカキ、ネズミモチ、ハクサンボク、クロキ、マンリョウ、イズセンリョウなど多くの種類が生育している。草本層にはヤブラン、フウトウカズラ、ハナミョウガ、ヒメアリドウシやコバノカナワラビ、ホソバカナワラビ、イタチシダなどのシダ類が優占的に生育している。

このような群落構成をしている自然生のシイ林は現在では極めて少ない。特に太平洋戦争後は、戦災による建築資材の需要増大に基づき、国土緑化運動が高まりを見せ、スギやヒノキなどの建築用材の植林運動が行われた。そのため、シイやカシなどは雑木として取り扱われて伐採され、植林地に変わっていった。伐採された跡地にはスタジイやコジイなどを主とする二次林が発達する。二次林は自然林のミミズバイースタジイ群落に比べて群落を構成する種類が単

純であり、群落を特徴づける標徴種を欠くことが多い。群落の構成をみると、アラカシやマテバシイ、クロキ、クチナシ、トベラ、ツワブキ、オオカグマ、ハナミョウガなどの種群が高い常在度で優占している。

花尾山の海拔四八〇㊦あたりにみられるスダジイやタブノキの優占する群落、八重山の海拔五〇〇㊦あたりのスダジイやマテバシイの優占する群落、上宮岳山頂帯のスダジイやマテバシイの優占する群落などは、シイ群落の二次林とみなされる。

イチイガン群落

イチイガンシは谷沿いの斜面、河川沿いの沖積地、河岸段丘地などの湿潤な肥沃地などに大木となって生育していることが多い。また、丘陵地や山麓の斜面のコジイやスダジイの林内にイチイガシを含むことがある。鹿児島県南部にはイチイガシが群生してイチイガン群落とされる群落は極めて少ないようである。

花尾神社社殿下斜面にはスギと混生するイチイガシの群生がある。亜高木層や低木層にはイチイガシ、タブノキ、ヤブツバキ、ヤマビワ、ムクノキ、ハクサンボク、ヤブニツケイ、メダケ、ヒサカキ、ハナイカダ、アオキ、イワガネ、ヤツデ、ナンテンなどが生育し、下草にはヤブラン、フキ、ドクダミ、シヤガ、ヒメヒオウギズイセン、キミズ、フウトウカズラ、テイカカズラ、ミゾシダ、ヤリノホクリハランその他が自生している。

イチイガシはクスノキなどのように神社の境内に栽植されて巨木となって生育しているものがあり、大浦の山祇神社や白石の一之宮神社境内にも一本の巨木が根を張って生きている。

マテバシイ群落

マテバシイは南九州では海岸地帯の低平地から内陸部の山頂帯までのあらゆる立地や群落に広く分布している。しかし、奄美大島や沖縄地方など南方にいくと山頂帯にしか生育していない。逆に北の方にいくと海岸地帯でしか見られない。このことからマテバシイは南九州が分布の中心地帯ではないかと考えられる。鹿児島県下では沿海地の人家付近の里山や海岸林などに純群落状に発達したマテバシイ群落を見ることができ、林内を調べてみると、マテバシイは切り株から何本かの幹が株立ちした萌芽林であることが多い。

このことは純群落状に発達したマテバシイ群落もかつてはシイノキやタブノキ、アラカシなどの混生する群落であった。しかし、伐採を繰り返していくうちに土壌は流出し、乾燥化して腐植質の少ない貧栄養状態に悪化していった。このような悪化した厳しい環境状態で生育しにくい植物たちは、生存を厳しく制限されて次第に消滅していった。反対に土質の悪化した乾燥した条件にも耐えられる生育力の旺盛なマテバシイはますます繁殖していったと考えられる。人が伐採という手を加えて絶えず自然に干渉することによって、マテバシイのような植物だけが生育するのに適した環境に変えられ、そのような環境が持続的に維持されることによって、マテバシイ群落が持続群落として継続的に成立しているわけである。

マテバシイ群落は人家近くの里山や沿海地の海岸林として発達しているだけではない。人手の及ばないような僻遠の地や孤島、急峻な岩崖地や岩峰、高山地や稜線帯などでも群落を形成している。このような立地の群落は、もともと乾燥その他の粗悪な環境条件に強

いマテバシイの自然生の群落であつて、人里近くの二次的に発達した群落とは異なる群落として取り扱われるべきものと考えられる。

マテバシイ優占群落は郡山町内において人家近くの里山から八重山や花尾山、重平山などの高山地にわたり各地に発達している。群落の構成は高木層はマテバシイ、スダジイ、タブノキ、ヤブツバキ、ヤブニツケイなどが、低木層はヒサカキ、サザンカ、クロキ、イズセンリヨウ、ハクサンボク、ネズミモチなどが、草本層はハナミョウガ、フユイチゴ、テイカカズラ、フウトウカズラ、ヤブラン、ノシラン、コバノカナワラビ、マルバベニシダ、ヤマイタチシダなどが優占的に常在している。

アカガシ群落

アカガシは材が淡紅褐色で赤みが強いことによつて付けられた名前である。アカガシ群落は鹿児島県内では海拔およそ四五〇〜九〇〇の範囲にウラジロガシ、イスノキなどと混生する群落を形成しているのが普通である。この高度域は全体的にはイスノキ〜ウラジロガシ群落の成立する範囲で、アカガシ群落はその中で土壌条件や湿度条件などが適した立地に部分的に成立している群落と考えられる。したがつて、イスノキ〜ウラジロガシ群落の主要構成種群のウラジロガシ、イスノキ、ヤマザクラ、イヌツゲ、ハイノキ、ミヤマシキミ、シキミ、ヤブツバキ、サカキなどが優占的に常在している。

八重山の山頂帯に見られるアカガシ群落の高木層は、アカガシの他にマテバシイ、イスノキ、ウラジロガシ、スダジイ、シロダモ、ホソバタバなどによつて構成され、亜高木層や低木層にはヤブツバ

キ、サザンカ、イスガシ、クロキ、ミヤマシキミ、シキミ、アオキ、イヌカヤ、ハイノキ、ヤブニツケイ、ルリミノキ、コガクウツギなどが常在的に生育している。草本層にはナルコユリ、イチヤクソウ、オモト、サイコクベニシダ、ヤマイタチシダなどが生育している。また、ギンリョウソウが生育しているのが見られる。

花尾山や重平山、上宮岳などの山頂帯にも同じような組成をしたアカガシ群落が発達している。

二次性落葉低木林群落

森林伐採跡地、林縁、耕作放棄地、道路沿いの藪地などにはカラスザンショウ、ハゼノキ、アオモジ、アカメガシワ、エゴノキ、ネムノキ、クサギ、イヌビワ、タラノキ、ゴンズイ、イヌザンショウ、ヌルデなどの落葉低木類、ヒサカキ、ネズミモチ、サザンカ、アカカシ、スダジイ、イズセンリョウなどの常緑広葉樹類、及びヤマノイモ、ヒメドコロ、クズ、アオツツラフジ、サルトリイバラ、ノイバラ、ビナンカズラ、ノブドウ、エビズル、ムベ、アケビなどのつる植物などが混生する先駆的植物群落が発達している。群落立地の条件によつてアオモジ優占群落、カラスザンショウ優占群落、クサギ優占群落、アカメガシワ優占群落など多様な群落を形成しているが、群落の組成は基本的には変わらない。

森林の伐採直後や耕作放棄直後の空き地にはまず一年生草本植物群落が発達し、多年生の植物群落を経て落葉低木林群落に変わっていく。そのまま放置すると、やがては常緑広葉樹林であるシイ林群落やタブ林群落に更新していくものである。

スギ・ヒノキ植林

郡山町の山地の大部分はスギ・ヒノキの植林地となっている。終戦後の荒廃した国土の復興、山林の緑化、建築資材の需要拡大などによる国土の緑化推進運動の高まりから、低地から山頂付近にいたるまでのあらゆる山地に植林を実施してきた。植林された樹種は建築用材として価値の高いスギやヒノキなどの針葉樹がほとんどである。シイやカシなどの常緑広葉樹類は雑木として扱われ、これらの自然林の多くが伐採されて、その跡地にはスギやヒノキなどの針葉樹類が植林されていった。

しかし、その後のわが国の林業は低廉な外国産の輸入材に押されて低迷し、林業就業者の高年齢化にも伴い、林業人口は激減して森林管理や手入れも十分されない放置状態の山林が多くなっている。

つまり、それらは植林されたままの状態で放置され、間伐もされなければ枝打ちもされないままの粗悪な状態の森林である。

植林されてから三〇年以上も経った林内には、植林される以前の自然の植生であったシイ群落やタブ群落などの構成種群が生長している。すなわちタブノキ、スダジイ、マテバシイ、ミミズバイ、ヤマビワ、コバンモチ、ホルトノキ、ヤブツバキ、ヒメユズリハ、クロキなどの高木類やヒサカキ、ネズミモチ、ハクサンボク、イズセンリョウ、クチナシ、イヌガシなどの低木類及びハナミョウガ、ヤブラン、ノシラン、ヤブコウジ、フユイチゴ、テイカカズラ、フウトウカズラ、ヒメアリドウシ、コ克蘭、コバノカナワラビ、イタチシダ、サイゴクベニシダなどの草本類が常在的に見られる。

竹林

鹿児島県は竹の主産地として全国的に知られている。それは温暖

多雨の気候条件や地理的条件により固有種が多いこと、分布の南限種や北限種が多いことに併せて中国などの近隣から有用な竹が容易に導入できたことにより、栽培が盛んに行われたためだろう。鹿児島県で現在知られている竹類は約八〇種で、そのうち約三五種が自生種であるという。また、本県の有用竹林面積は一万五〇〇〇畝余りと全国一を誇っている。

近年、竹林が拡がっているといわれる。竹類は陽性の植物である。すなわち乾燥した日当たりのよい空き地があったら早速侵入する。

特にホテイチクやメダケなどは著しい。高木で覆われている鬱蒼と生い茂った森林には侵入できないし、生育できない。高木が伐採されたりして空き地ができると、そこに侵入したり、繁殖したりできる。よって森林が伐採されたりした跡地などの空き地には竹林ができやすい。また、竹類は地下茎を這わせて広がるので、竿が高く伸びるまでは日当たりは無くてもよいので、林のなかにもはびこりやすい。

ア：モウソウチク 江南竹ともいい、孝子孟宗に因んだ名前である。

中国南部原産のタケで、元文元年（一七三六）、琉球を経て磯庭園（鹿児島市吉野町）に植えられたものが全国に広まったといわれる。モウソウチクはタケノコを食用として利用するばかりでなく、建築用材や用具材としても広く利用され、集落周辺の里山の山麓から山腹にかけての緩傾斜地に多く栽培されている。また、地下に地下茎を張り巡らしているので、屋敷の裏山の崩落防止にも役立っている。林内にはアラカシ、タブノキ、ナナメノキ、ヤツデ、アオキ、ミゾシダ、ヘラシダなどが常在的に見られる。郡山町では早掘りタケノ

コを生産しており、昭和一〇年（一九三五）の十一月、鹿児島に行幸された昭和天皇の御料筈に選ばれたことがある。

イ：マダケ ニガタケ・カラダケともいい、タケノコは多少苦味がある。古くは中国から伝えられたものといわれてきたが、新生代中新生の化石や縄文時代や弥生時代の遺跡から出土するので、日本在来のタケである。タケノコは多少苦味があるが、竿は節間が長く、緻密で弾力があるので、竹細工用材としての価値は高い。同じく工芸に適材のハチクは、粘りがあつてカツオの釣竿などに利用されていたというが、町内において確認できなかった。マダケのタケノコの時期はモウソウチクよりも遅く、例年五月中旬ごろである。

ウ：ホテイチク 根元の節間が短くて膨れている様子を布袋様のお腹に見立てて名づけられた。コサンとかコサンダケともいわれ、タケノコは五月ごろでもおいしい。釣竿や杖などに利用される。もともと中国原産のものが野生化して広まったといわれるが、現在では至る所に群生している。山を荒らすと竹藪になるといわれるように、植林した森林や里山が伐採や災害などで荒廃するとホテイチクがはびこってくる。

エ：ホウライチク キンチクダケとも云つて幹が黄色くなることが多い。ホテイチクなど多くのタケは地下茎が地中を這つて広がつていくが、ホウライチクは茎の先が地中を這わずにすぐに立ち上がつて竿になり、株立ちになる。だから、生垣に利用したり、山林の境界に植えられたりする。また、防災のため川の堤防にも植えられる。八月の暑い時期に出る細いタケノコは土用竹ともいわれておしいが、鹿児島ではあまり利用されていない。かつては火縄銃の火縄

の材料として重宝されたので、薩摩藩では生垣に植えるように奨励していたという。

オ：メダケ 海浜の風衝地、河辺、丘陵地、耕作跡地、伐採跡地、藪地など、あらゆる空き地に侵入して群落を作る極めて旺盛な生育力を持った植物である。地下茎を這つてはびこるので、いったんはびこつたら根絶するのは容易ではない。タケノコは苦くて食用にならない。

メダケは女竹で、モウソウチク、マダケ、ハチク、ホテイチクなどは男竹といつて区別する。メダケの仲間には、他にカンザンチク（デメ・デミヨウ）やリュウキュウチクなどがある。鹿児島では「デメ、コサン、カラ、モソ」という言葉がある。これはタケノコをおいしい順に並べたものという。デメはダイミヨウチクすなわちカンザンチク、コサンはコサンダケすなわちホテイチク、カラはカラダケすなわちハチク、モソはモウソウチクのこと。とすると、最も多く利用しているモウソウチクは、味のほうでは最も下ということになる。因みにリュウキュウチクのタケノコはカンザンチクのタケノコの味と殆んど変わらないくらいおいしい。

原野の植物群落

森林の伐採跡地や耕作放棄地、造成地、懸崖地、崩落地その他、自然的または人工的影響で空き地となつたところに発達する植物群落を原野植物群落とした。すなわち、森林を形成する樹木群落と路傍などの草本を主とする人里植物群落とをつなぐグループである。

クズ群落

林縁や伐採跡地、荒廃した藪地などにアカメガシワ、ヌルデ、クサギ、イヌビワなどの落葉低木類とクズ、サルトリイバラ、テリハノイバラ、ノブドウ、エビズル、ヤマノイモ、ヘクソカズラ、スイカズラなどのつる植物で構成されている群落である。カナムグラの優占する群落も見られる。林縁に発達する群落は、内部の森林本体を生態的に保護する機能をしているので、マント群落ともいわれている。

マルバウツギ ヤマツツジ群落

山道沿いの斜面にはマルバウツギやコガクウツギ、ヤマツツジ、マルバハギ、ヤマハツカ、ツワブキ、ソクシンラン、ゼンマイ、ホシダなどを主とする低木群落が発達している。初夏のころ、赤いヤマツツジの花とマルバウツギやコガクウツギの白い花を眺めながらの野山歩きは楽しい。

ヤマハツカ オトコヘシ群落

秋の山道にはハギやクス、ススキなどの秋の七草の他にもヤマハツカ、オトコヘシ、ヒヨドリバナ、ミソナオシ、ヒキオコシ、ツワブキ、ホトトギス、ノダケ、カルカヤその他色とりどりの花が咲き競っている。ヤマハツカやオトコヘシが特に目に付いたので、ヤマハツカ―オトコヘシ群落とした。

ススキ チガヤ群落

森林の伐採跡地や耕作放棄地、道路沿いの空き地、造成地など、どんな立地にも一年生草本植物群落の時代の跡には、ススキやチガヤを主とする多年生草本植物群落に移り変わる。ススキ草原は原野植生を代表する高茎の二次草原で、チガヤ、ヨモギ、スギナ、メヒ

シバ、ヨメナ、オオアレチノギク、ヒメムカシヨモギ、カルカヤ、トダシバ、メドハギ、テリハノイバラ、ヤハズソウなどの植物が常在的に見られる。また、ヌルデ、アカメガシワ、サルトリイバラ、イヌビワなどの落葉低木類も混生するようになる。

森林伐採後一〜二年位経過した立地にはまず、ベニバナボロギクやタンポポロギクなどの帰化植物やヤクシソウなどの一年生植物群落が発達する。

ハチジョウカグマ群落

ハチジョウカグマはタイワンコモチシダの別名がある。コモチシダよりも大型の南方系のシダで、やや海洋性である。崖地や急傾斜地に群生する。群落にはミゾシダ、ヘラシダ、ゲジゲジシダなどのシダ類が混生した群落を形成している。やや乾燥した崖地や切り通し、石垣などにはイタチガヤ―ゲジゲジシダ群落が発達し、タチシノブ、トラノオシダ、オニタビラコ、コナスビ、カタバミなどが混生している。また、石垣や崖地にはオオイタビやヒメイタビが吸着する根で張りついて繁茂している。

路傍の植物群落

農道沿いや林道沿い、田畑のあぜ道、人家周辺の空き地など人の息のかかる空域に、人の生活に密接なかわりをもって生きている仲間、人里の植物と呼ばれているグループを総称している。田畑という人が作りだした特殊な環境に適応して生活している雑草の仲間と、人の生活とは関係なく生活している野草の仲間とをつなぐ仲間が人里植物である。しかし、一般的には田畑の雑草も人里植物も

区別せずに雑草として取り扱っている。

カラムシ群落

農道沿いや林道沿い、田畑のあぜ道、耕作地の周辺などにカラムシが密生している群落が見られる。群落にはオドリコソウ、ヤブジラミ、ムラサキカタバミ、カタバミ、ツルソバ、ヘクソカズラ、カキドウシなどが混生している。カラムシは多年生草本で根茎は木質化して地中を這って繁殖し、茎を密生させて群生するので、他種が混入しにくい。そのため、カラムシの優占度が極めて高い群落となっている。繊維を織物に利用するため古くから栽培されてきたものが野生化したものと考えられる。茎（カラ）を蒸して皮をはいで繊維をとったのでカラムシの名がついた。

ヨモギ ヨメナ群落

田畑の畦、農道沿い、農耕地周辺の空き地、林道沿いや林縁部、畑地など絶えず人為的影響を受ける適潤な立地に発達している。地下茎を這って繁殖し、茎は群生する。ヨモギは若芽を摘んで草餅にしたりして食用に利用される。また、もぐさの材料にするなど薬用としても広く利用されている。カタバミ、トウバナ、キツネノマゴ、ウマノアシガタ、イヌタデ、ヘビイチゴ、サギゴケ、ヒメクグ、スギナなどの種群が常在的に高い優占度で生育している。

セイダカアワダチソウ群落

セイダカアワダチソウは北アメリカ原産の帰化植物で、戦後急激に全国的に広がっていった植物である。繁殖力が旺盛で休耕地や土手、路傍、空き地、宅地造成地、埋立地など至る所にはびこり、他の植物の侵入を許さないほどに急速に繁殖して密生していること

が多い。鮮やかな黄金色の美花を密生して秋の野を彩っている。しかし、ブタクサと共に花粉症の原因とされ、公害雑草として忌み嫌われてきた。また、畑地の強害草でもある。セイダカアワダチソウは二倍以上にも生長して群生するので、群落内に混生する植物はヨモギ、ヒメジョオン、オオアレチノギク、アキノノゲシ、ヤブジラミ、スギナ、チガヤ、ススキ、メヒシバなどの種群が散生的に見られるにすぎない。

ギシギシ群落

河原の土手、水田の畦、溝の周辺など湿気の高い富栄養地に発達する好窒素性の植物群落である。ギシギシの他にスイバ、キンポウゲ、ヨモギ、ヨメナ、ヘビイチゴ、チドメグサ、ヒメクグ、サギゴケ、スズメノヤリ、オオバコ、ヒメジョオン、オオアレチノギク、ヒメムカシヨモギ、カラスノエンドウ、カモジグサなどが優占的に混生している。ギシギシ群落の成立する立地よりも多少乾燥した河原や土手、路傍、耕作地周辺の草地などには、スイバやキンポウゲなどが優占する群落が発達している。

オオバコ群落

人や牛馬、車などによって絶えず踏みつけられる路上、運動公園、土手などにオオバコ、チドメグサ、シロツメグサ、カタバミ、ギョウギシバ、ヤハズソウ、ニシキソウなどのように直立する茎を出さない植物やクサイ、ネズミノオ、カゼクサ、オヒシバなどのような踏み付けに強い植物たちで構成される群落が発達し、踏み跡群落といわれる。

踏み付けの度合いによって路上や路辺の植物群落には違いが見られ

る。たえず踏み付けられる路上にはオオバコ、ギョウギシバ、カタバミ、チドメグサなどを主とする群落が発達する。踏み付けの度合いが少なくなってくると、ネズミノオ、チカラシバ、カゼクサ、オヒシバなどが混生する群落が発達するようになる。踏み付けなどの人的影響が減少するにつれて落葉低木類やつる植物などが次第に増加してくるようになる。

畑地の雑草群落

人類が狩猟生活をやめて定住生活をしていくためには生活に必要な物資特に食料などを確保しなければならない。そのため、農耕をはじめ、作物を栽培してきた。土地をたがやし、肥料を施すことによつて耕作地という特殊な環境を作ってきた。必要な作物を作るために土を耕し、肥料を施しているわけであるが、このような耕作地という特殊な環境に勝手に入り込んできて生活しているのが雑草たちである。作物を作るための耕作地で、作物の生育を阻害し、邪魔をしているのが雑草たちである。

雑草にはもともとその土地に自生していた山野草や人里植物、作物と共によそから伝播したもの、帰化植物、以前は作物として栽培されていたものなどがある。日本の雑草は『日本雑草図説』（笠原安夫著）によると、畑地雑草三〇二種、水田雑草一九一種計四九三種が知られている。

春（冬）に中心を持つ雑草

春に花を咲かせて種子をつける植物たちは昨年秋に芽を出し、寒い冬を越して花を咲かせるので、越年草（二年草）といわれる。越

年草は寒い冬を越す知恵を持っているので、これらの雑草たちの故郷は寒い北方または西方といえる。

ア 春の七草 セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロはすべて越年草か多年草である。セリはセリ科の越年草で栽培もされてよく利用されている。ナズナはアブラナ科で果実の形が三味線の撥に似ていることからペンペン草の別名がある。ゴギョウはキク科の越年草でハコグサのことである。ハコベラはナデシコ科の多年草でハコベである。メジロなど小鳥の餌にハコベのすり汁を使うとよく食べていた。ホトケノザは現在のシソ科のホトケノザと混同されがちである。春の七草のホトケノザは現在ではコオニタビラコといい、キク科の植物で田んぼに生え、黄色の花をつける。

一般にスズナはカブ、スズシロはダイコンとされているが、カブやダイコンは畑に栽培される野菜で、他の五種類は野草である。春の野にいでて若菜摘むと詠まれていることから、スズナはノビル、スズシロはヨメナとした方が妥当と考える。また、ノビルやヨメナは古くから食用に利用されてきた野草である。

イ レンゲソウ ゲンゲともいい、中国原産のマメ科の越年草。緑肥として田んぼに播種しているが、赤紫色の花の満開は赤い絨毯のように春の田んぼを彩る。「春の小川」の童謡にもうたわれているように春の田園の代表的景観の一つである。ゲンゲ畑の中にはカラスノエンドウ、カモジグサ、カズノコグサ、スズメノテツポウ、オオアレチノギク、ハハコグサ、コオニタビラコなどが混生している。

ウ その他 春の雑草としてタンポポ（セイヨウタンポポが多い）、

スギナ、オオイヌノフグリ、ヒメウズ、フキ、タネツケバナ、イヌガラシ、スイバ、ギシギシ、カキドウシ、ハルノノゲシ、ミヤコグサ、スミレ、サギゴケ、セトガヤなど多くの雑草が田畑や畦およびその周辺の空き地に咲き競っている。

秋(夏)に中心を持つ雑草

春先に種子が発芽して生長し、花を咲かせて結実してその年の内に一生を終えてしまうアサガオやヒマワリなどのような一年生の雑草たちが主である。このような雑草たちは寒い冬を越す経験を持たないので、寒い冬を越す術を知らない。このような仲間はイネと共に南の暖かい地方を故郷とする植物たちである。

畑にはサツマイモやサトイモを栽培しているところが多い。また、カボチャ、キュウリ、ナスなどの野菜類の畑もある。これらの畑にはコミカンソウ、ニシキソウ、コニシキソウ、ウリクサ、ザクロソウ、エノキグサ、ツユクサ、マルバツユクサ、スベリヒユ、イヌビユ、カタバミ、メヒシバ、カヤツリグサ、コゴメガヤツリ、ハماغ、エノコログサ、スギナ、オオイヌノフグリ、ハコベ、ウシハコベ、ナズナなどが常在的に優占的に生育している。場所や季節の移り変わりによってツユクサーマルバツユクサ優占群落、スベリヒユ優占群落、イヌビユ優占群落、メヒシバ優占群落、エノコログサ優占群落などとして認められる。これらの群落はコミカンソウやウリクサを標徴種とするコミカンソウウリクサ群落にまとめられている。

耕作放棄地の雑草群落

耕作を停止して一〜二年を経過した畑地にはオオアレチノギク、

ヒメムカシヨモギ、ヒメジョオン、ベニバナボロギク、アキノノゲシなどの一年生の高茎の雑草で覆われた群落が発達してくる。群落にはススキ、チガヤ、ヨモギ、ホウキギク、メヒシバ、エノコログサ、ツユクサ、イヌタデ、キツネノマゴ、ゲンノシヨウコ、カタバミ、ツボクサ、ヘクソカズラ、スズメノエンドウ、ノアズキなどが混生している。このような群落はヒメムカシヨモギオオアレチノギク群落としてまとめられ、全国的に共通した種類で構成されている。やがてヌルデ、アカメガシワ、クサギなどの落葉低木類も侵入してくる。

水田の雑草群落

水田には乾田と湿田がある。乾田は沖積低地から丘陵地にかけて造成された水田で、イネを栽培する夏季は湛水状態であるが、秋から春までの休耕期間は排水期となる。これに対して湿田では年間を通して立地の変化は殆んど見られない。

夏季の水田雑草群落

イネの栽培をしている期間は乾田でも湿田でも湛水期で、イネの栽培管理に適応した耐湿性で好窒素性のウリカワ、コナギ、キカシグサ、アブノメ、イヌビエ、マツバイ、タマガヤツリ、タネツケバナ、タカサブロウ、チョウジタデなどによって構成される水田雑草群落が生育している。

冬季の水田雑草群落

イネの栽培が一時的に停止する秋から翌年の春までの休耕期は排水期で、ノミノフスマ、ケイツネノボタン、スズメノテツポウ、セ

トガヤ、タネツケバナ、アオカモジグサ、オオアレチノギク、ヒメジヨオン、サギゴケ、ツメクサ、カラスノエンドウ、タガラシ、ハハコグサ、コオニタビラコ、ナズナなどの種群が生育するノミノフスマーケキツネノボタン群落が発達する。この乾田にはゲンゲ（レングソウ）の種子を播種してゲンゲ畑にするところもある。

山間の湿田にはスズメノテツポウ、タガラシ、タネツケバナなどが優占する群落も見られる。

休耕水田の雑草群落

休耕水田にはハイキビ群落が発達し、シロバナサクラタデ、ツルソバ、オオアレチノギク、ヒメジヨオン、オオホウキギク、タカサブロウ、アキノノゲシ、スズメノテツポウ、サワスズメノヒエ、チガヤなどが生育している。立地によってはオオホウキギク群落やオオアレチノギク群落、ナズナ群落などとなっている群落も見られる。ハイキビは休耕水田ばかりでなく、田畑の畦や路傍、湿地から海岸の砂丘地など低平地の至るところに群落を作って旺盛に生育している植物である。

水湿地や河辺の植物群落

ヨシ群落

ヨシとセイタカヨシ（セイコノヨシ）がある。セイタカヨシはヨシに比べて茎は二〜四倍と高く壮大である。河口付近の海水にかかる汽水域からやや乾燥した河原の土手にも生育する。群落にはシロバナサクラタデ、ミゾソバ、ハイキビなど数種が見られるにすぎない。

ツルヨシ群落

地上を這う長いつるを伸ばして広がり、河辺や河の洲などに群落を作っている。群落にはミゾソバ、クサヨシ、イヌタデ、ヨメナ、セリなど数種が生育しているにすぎない。

③ミゾソバ群落

ミゾソバ群落は過窒素化した河川の中下流域、用水路、泥湿地、休耕水田などに見られる一年生草本植物群落である。群落にはイヌベ、セリ、ノミノフスマ、アシボソ、ジュズダマ、ハイキビなど数種の植物が混生しているに過ぎない。

オランダガラシ群落

オランダガラシはクレソンともいわれ、明治初年、外国人宣教師が軽井沢に植えたのが全国に広がったといわれる帰化植物で食用にされる。きれいな湧き水のところによく生えている。

第二節 郡山の貴重な植物

郡山町内には国や県の天然記念物などに指定されている植物はない。また、鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物の植物編にリストアップされている植物も極めて少ない。したがって、郡山町内において珍しい植物や植物群を上げてみる

八重山山頂のアカガシ マテバシイ群落

八重山の山頂稜線帯はアカガシ—マテバシイ群落によって覆われている。高木層はアカガシやマテバシイの他にイヌノキ、ウラジロガシ、スダジイ、ホソバタバ、カナクギノキ、シロダモなどが混生

している。亜高木層や低木層にはヤブツバキ、サザンカ、イヌガシ、サカキ、クロキ、ミヤマシキミ、アオキ、イヌツゲ、シキミ、ルリミノキ、イヌカヤ、シロバイ、ハイノキ、ヤツデなどが見られる。草本層にはサイコクベニシダ、イチヤクソウ、オモト、ナルコユリ、アケボノシユスランや、葉緑素を持たずに腐生生活をし、体全体がロウソクのような白色をしているギンリョウソウやハイノキ科の植物、特にクロキの根に寄生するツチトリモチなども生育している。郡山町では唯一の自然林といえるだろう。

また、キリシマミドリシジミの生息地でもある。キリシマミドリシジミはシジミチョウ科の蝶として、わが国の誇る華麗な珍蝶で、雄は金色を帯びた緑色をしている。大正一〇年（一九二二）に霧島で初めて発見され、その後各地で生息が確認されている。八重山は薩摩半島では生息の南限である。

花尾神社の森

花尾神社の境内にはイチイガシとスギの巨木の群生があり、周囲は大きく生長したスギ林に囲まれて荘厳な雰囲気醸し出している。スギ林内にはタブノキ、ムクノキ、イチイガシ、ヤマビワ、ヤブツバキ、ハクサンボク、ヤブニツケイ、ヒサカキ、ネズミモチ、ハナイカダ、イワガネ、アオキ、ヤツデ、イズセンリョウ、コムラサキ、ナンテン、ツルグミ、ミツバアケビ、ビナンカズラ、ヒメドコロなどの樹木類やつる植物が生育し、下層にはシヤガ、カラスビシヤク、マムシグサ、ハナミョウガ、ヤブラン、ドクダミ、フキ、ミツバ、ヒメヒオウギズイセン、マツカゼソウ、フウトウカズラ、テイイカカズラ、フユイチゴ、ヤリノホクリハラン、オオイワヒトデ、イシカ

グマ、ミヅシダ、ホシダ、キミズその他が見られ、ガンゼキランやフユノハナワラビも生育している。

一之宮神社の社林

白石にあり、神社正面の左右には胸高三九〇センチのイチイガシやクスノキが植えられている。社殿の脇や後方にはコジイ、イチヨウ、イヌマキ、イスノキに混じってハクサンボク、シロダモ、アラカシ、ヤブツバキ、ヒサカキ、ホソバタブ、アオキなどが生い茂っている。

山祇神社のイチイガシ

大浦の山祇神社の境内にあり、胸高の幹周約四〇〇センチで、郡山町では最大の巨木である。単木で生育しており周囲が樹林という環境でないのが憂慮される。

ザイフリボク

シデザクラともいい、バラ科の落葉小高木または低木。四〜五月、白色の花をつける。県内では八重山、冠岳、西加世田、笠沙に自生。

ナンゴクミツバツツジ

ツツジ科の落葉低木。四月、上側内面に濃い斑点のある紅紫色の花をつける。イワツツジ（ハヤトミツバツツジ）に近い種類。八重山に産し、県内唯一の産地。

サクラジマエビネ

ラン科で、五月、緑黄色の花を密に多数つける。入来峠、川辺峠、桜島、颯娃、下甌（尾岳）に自生。

フクレギシダ

イワデンダ科の常緑性のシダ。熊本県天草町の福連木で発見。九州が分布の南限で、入来峠、鶴田、甌島に自生。

オキチモズク

淡水産の紅藻類の一種で愛媛県川内町のおきち泉で発見されたのでオキチモズクの名が付いた。わが国特産の淡水産紅藻類の一種で愛媛県川内町おきち泉、長崎県土黒川、熊本県南小国町志津川の産地は国の天然記念物に指定されている貴重な藻類である。この貴重な藻が昭和四九年（一九七四）に郡山町西俣（神之川上流）で鹿児島大学の新敏夫教授らによって発見されている。しかし、現在は確認されていないので、再度調査の必要がある。

町木イヌマキ・町花木イワツツジ・町花カンナ

イヌマキは庭園樹として、また生け垣としてよく手入れされている。鹿児島市の照国神社境内や市比野ゴルフ場の見事なイヌマキも郡山で育成されたものである。

イワツツジの正しい名前はハヤトミツバツツジで、多くの庭園に植えられて鑑賞されている。かつては上宮嶽の崖地に群生していたが、現在はほとんど見られなくなったという。

【参考文献】

『日本雑草図説』：笠原安夫、一九八一年、養賢堂



▲2.八重山(笹ノ段)



▲4.ムサシアブミ



▲6.ツチトリモチ



▲1.八重山(頂上)



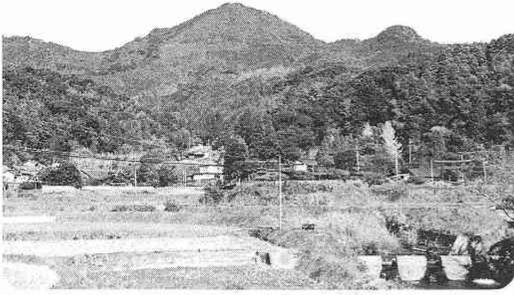
▲3.八重山山頂三角点



▲5.南から見た上宮岳(西雪元)



▲7.重平山遠望(仕明)



▲8.花尾山展望(宮脇)



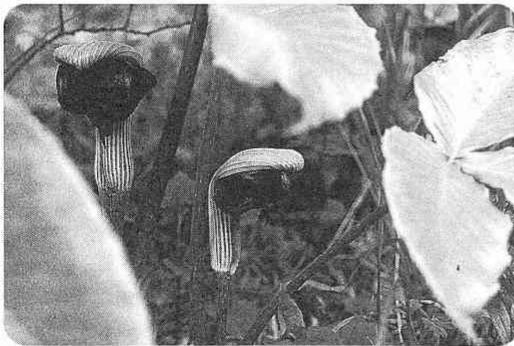
▲9.三重岳山頂(丸山)



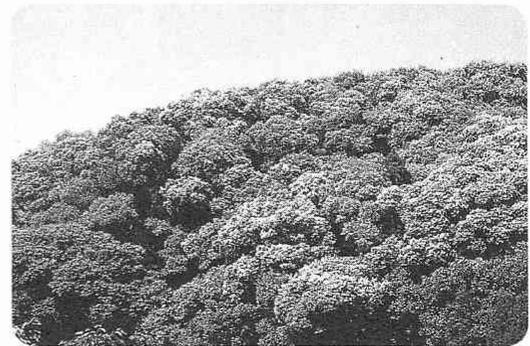
▲10.三重岳遠望



▲11.スギ林(三重岳登山道)



▲12.ムサシアブミ



▲13.シイ林(常盤)



▲14.ヤマツバキ(郡山麓)



▲15.ハクサンボク



▲16.ヤツデ



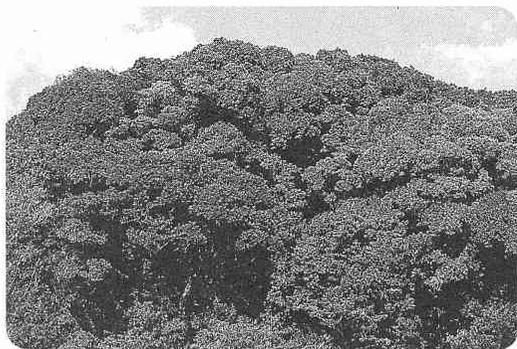
▲17.イチガシ林(花尾神社)



▲18.マテバシイ(茄子田)



▲19.ガマスミ



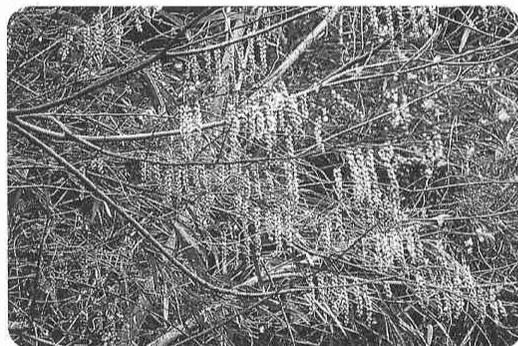
▲20.アラカシ林(郡山麓)



▲21.アカガシ林



▲22.ヤマザクラ



▲23.キブシ



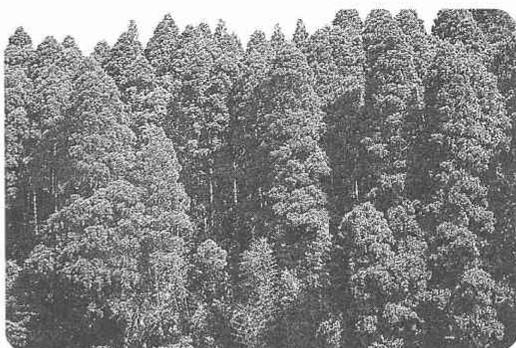
▲24.ゴンズイ



▲25.アオモシ



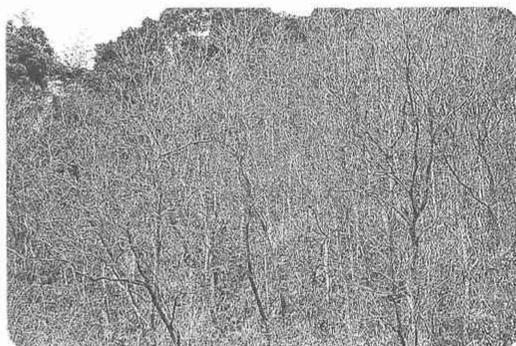
▲26.クサギ



▲27.スギ植林(西俣)



▲28.スギ植林(大下)



▲29.クヌギ植林(花尾)



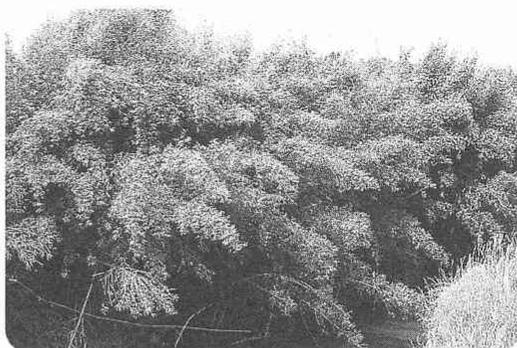
▲30.モウソウチク林(岩戸)



▲31.モウソウチク林(清和)



▲32.ホテイチク(東俣)



▲33.河畔のホウライチク(宇都)



▲34.メダケ(岩戸)



▲35.メダケ(大浦)



▲36.タケニグサ(丸山)



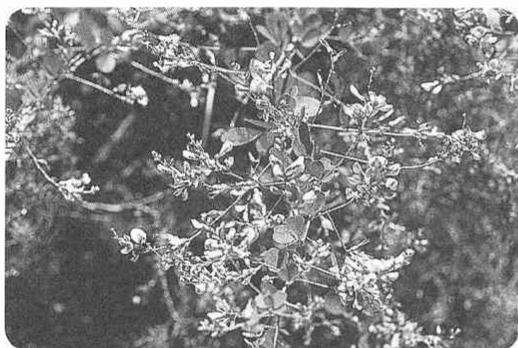
▲37.ヤクシソウ(郡山麓)



▲38.コガクウツギ(八重山)



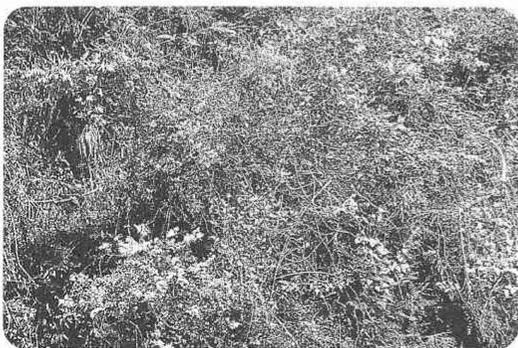
▲39.オトコヘシ(郡山麓)



▲40.マルバハギ(茄子田)



▲41.マルバウツギ(常盤)



▲42.ヤマツツジ(常盤)



▲43.クズ(東俣)



▲44.カナムグラ(東俣)



▲45.ハチジョウカグマ
“台湾コモチシダ”(岩戸)



▲46.イタチガヤ群落(郡山麓)



▲47.オオイタビ群落



▲48.ツワブキ(郡山麓)



▲49.チカラシバ(入来峠)



▲50.ヒヨドリバナ(郡山麓)



▲51.ハナウド(清和)



▲52.ワラビ(入来峠)



▲53.ゼンマイ(八重山)



▲54.スイバ(川田)



▲55.キンポウゲ群落(宇都)



▲56.タツナミソウ(花尾神社)



▲57.キランソウ(仕明)



▲58.カラムシ(丸山)



▲59.ヒガンバナ(東雪元)



▲60.フキ(東雪元)



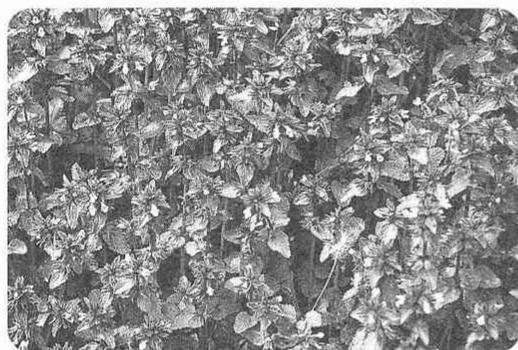
▲61.シロバナタンポポ(白石)



▲62.ツクシ(西雪元)



▲63.ハルジオン(清和)



▲64.ホトケノザ(花尾)



▲65.ハコベ(雪元)



▲66.ナズナ(西雪元)



▲67.アレチマツヨイグサ(丸山)



▲68.イヌタデ(東侯)



▲69.カヤツリグサ(東侯)



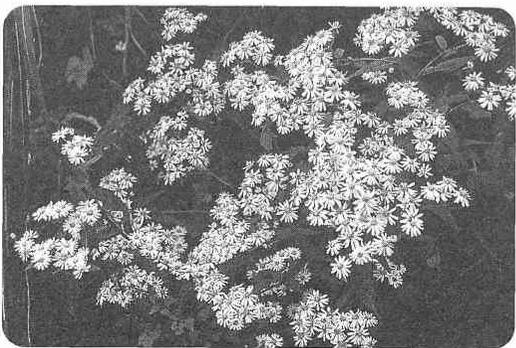
▲70.ナノハナ(有屋田)



▲71.レンゲソウ(常盤)



▲72.カモジグサ(川田)



▲73.ヨメナ(郡山麓)



▲74.ハハコグサ(宇都)



▲75.ウリカワ(東俣)



▲76.ウキクサ(東俣)



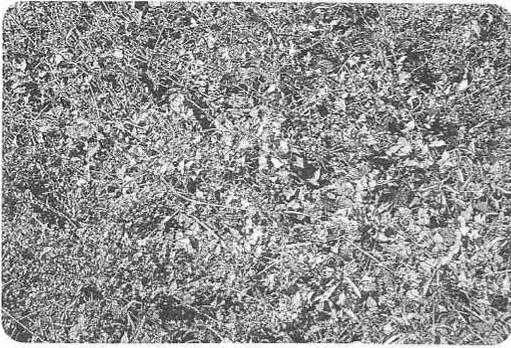
▲77.水田の雑草(西俣)



▲78.水田の雑草(西俣)



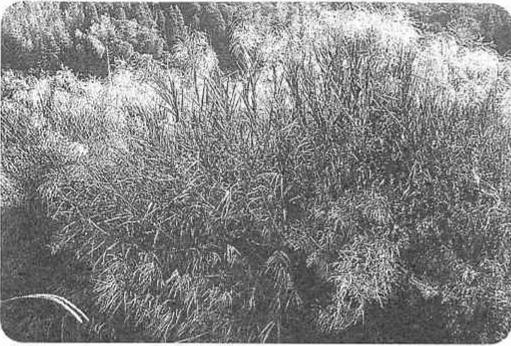
▲79.シマスズメノヒエ(丸山)



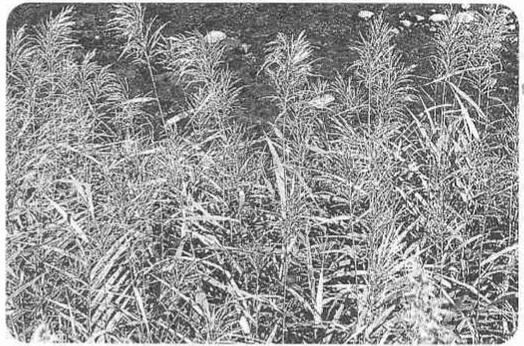
▲80.ミゾソバ群落(川田)



▲81.オランダカラシ(上常盤)



▲82.ヨシ群落(清和)



▲83.ツルヨシ(東俣)



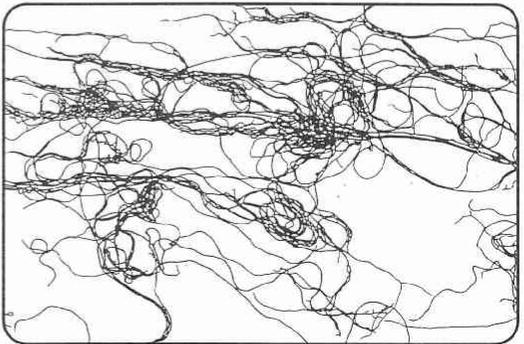
▲84.スギ林(花尾神社)



▲85.八重山山頂帯



▲86.ギンリョウソウ(八重山)



▲87.オキチモズク
(昭和49年コピー)

第二章 動物

第一節 哺乳類（獸類）

ネズミ科

ホンドアカネズミ：平地から低山地にかけて普通に見られる種で、

本州、四国、九州に分布している。北薩の紫尾山、市来町、知覧町、枕崎市などから捕獲や採集の報告がある。

ホンドヒメネズミ：森林性の小形のネズミで、各地の森林に普通に見られる。本州、四国、九州に分布している。

ホンドカヤネズミ：薩摩半島の全域の水田や畑地付近のチガヤの群生地で見られる小形のネズミで、尾は頭胴よりも長い。本州、四国、九州に分布する[㊦]。

ニホンハツカネズミ：耕作地付近に生息する日本の野生亜種のネズミで、本州、四国、九州に分布する。ヨウシュハツカネズミよりも小形で、尾は頭胴よりもはるかに短い。

ニホンクマネズミ：山間の農耕地に生息している。尾は頭胴長にほぼ等しい。本州、四国、九州の大部分の地域に産するものは

ニホンクマネズミとヨウシュクマネズミの雑種とみられる。

ニホンドブネズミ：内陸部や山間部に生息し、ヨウシュドブネズミよりも小形である。ニホンドブネズミは古い時代に朝鮮半島

から渡来したものではないかといわれる。

ヨウシュドブネズミ：市街地だけでなく海岸地帯にも分布域を広げている。ヨーロッパやアメリカを始め、全世界に分布して

る。

トガリネズミ科

サイゴクジネズミ：体長七センチ位でモグラに似ている。主に海岸地方の畑地に棲んでいる。夜行性で、日中は殆んど活動しない。本州中部から四国、九州本土に分布する。

モグラ科

キュウシュウヒミズ：ヤマモグラとも呼ばれている。夜行性で、夜間は地上にも出て活動する。薩摩半島全域に棲んでいる。

コウベモグラ：平地の畑地や市街地などの人工的で、肥沃な土地に棲んでいる。九州南部は殆んど本種が占めている。

キクガシラコウモリ科

ニホンキクガシラコウモリ：水路の暗渠の中、山中の岩の割れ目、自然の洞窟、廃坑の中などに棲んでいる。海岸地帯に普通に見られる。

ニホンコキクガシラコウモリ：ニホンキクガシラコウモリよりも小形で、鼻葉の中央の突起で区別できる。

ヒナコウモリ科

ホンドノレンコウモリ：本種は明治三八年（一九〇五）に宮崎県の田野村で最初に発見された貴重種である。昭和四八年（一九七三）、伊作の亀丸城址（吹上町）の旧日本軍の防空壕内で採集されたのが九州で二番目の分布地である。

ニホイヤマコウモリ：大形のコウモリであるが、分布状況などについては明らかにされていない。今後、山地を詳しく調査することによって分布域は広がるものと予想されている。

アブラコウモリ：イエコウモリとも呼ばれ、人家の屋根裏などに生息するごく小形のコウモリである。南薩地域の各地で分布が確認されている。

オナガザル科

ニホンザル：サルは薩摩半島では北薩の紫尾山系から南薩の野間岳に至る各地で観察されるようである。郡山町の八重山などからも報告があるようである。

ウサギ科

ノウサギ：天敵のキツネの減少や山林の荒廃等によってノウサギ生活環境がむしろよくなったのか生息数が増加しているのか山林中では夜間に道路で出会うことが多い。

リス科

キュウシユウムササビ：重平山に生息が知られている。その他、薩摩半島では北薩の国見山地や紫尾山地、薩摩町の中岳や池山、串木野市冠岳、南薩の金峰山などが主な生息地として知られている。

イヌ科

ホンドタヌキ：山地に多いが、人家付近にも生息している。雑食性で、ネズミや爬虫類、両生類、昆虫類及び果物類などを食している。近年、繁殖の好条件に恵まれて増殖しているようである。市街地付近でもよくみかけられるようになってきている。

ホンドキツネ：尾は長くて足の三倍もあり、先は白い。色彩は地方的に著しく異なる。特殊な臭いをだす。本州、四国、九州に分布する。

イタチ科

ホンドテン：鹿児島県下のテンはステンだといわれる。ステンは社殿や人家付近に、キテンは山地の樹洞に生息する傾向があり、木に登ることもある。北海道、本州、四国、九州から満州、中国、シベリア、北ヨーロッパに分布する。

ホンドイタチ：本州、四国、九州、奄岐、伊豆大島に広く自然分布しているが、奄美大島や北海道にも移入して繁殖している。夏期は畑地付近に、冬期は人家付近に棲んでいる。ネズミやトカゲ、カエル、ニワトリなどを食べている。

ニホンアナグマ：四肢は太く、手足の爪は異常に長くのびている。山林中に穴を掘って棲んでいるが、人家付近にもいる。夜行性で雑食性である。最近では餌を求めて集落内にも現れるようになってきた。本州、四国、九州に分布する。

イノシシ科

ニホンイノシシ：雑食性で、夜間に土を掘り返してミミズやサワガニ、ヘビ類、ネズミなどの動物類、サツマイモ、マメ類、草木の根などの植物を食べている。本州、四国、九州に分布するが、北陸地方や東北地方などの寒冷地には殆んど生息しない⑧

獣類については、参考文献と鮫島正道の教示を受けてまとめたものである。

【参考文献】

森田忠義「薩摩半島西部及び北薩地方の哺乳類」：『鹿児島県自然

愛護協会報告』、一九七四年

第二節 鳥類

1 留鳥りゅうちよう

スズメなどのように、年中同じ所に留まって過ごす鳥を留鳥という。しかし、留鳥でもウグイスやヒバリなどのように季節によって棲む場所を移動している鳥を漂鳥ひょうちようという。

サギ科

ゴイサギ：上面は緑黒色。後頭の白色の長い飾羽が顕著。㊦

アオサギ：体上面が灰色。目の後から後頭部へ黒い帯と冠羽㊦

タカ科

トビ：全体暗褐色で、尾は叉状となる。

ノスリ：黒褐色の中型の鷹。

キジ科

コジュケイ：中国南部原産で、一九一九〜二三年放鳥したもの。

ウズラより大きい。

コシジロヤマドリ：キジより大きく尾は長い。体全体銅褐色。

キュウシユウキジ：わが国特産の鳥で尾は長く、下面全体が金属

緑黒色で美麗。

チドリ科

イカルチドリ：主として河川の中流以上の河原や池畔に営巢。

ハト科

キジバト：わが国産ハト類中最も多い。北海道、本州、四国、九州で繁殖。

カワセミ科

ヤマセミ：カワセミ類中最大。白と黒の斑で美しい。山地の溪流に沿って生息する㊦

カワセミ：上面瑠璃色、下面栗色で、嘴は長く、尾は短い。川畔や池畔に生息㊦

キツツキ科

カゴシマアオゲラ：頭上は全体鮮紅色。わが国の特産亜種で、低山帯の森林に生息。

キュウシユウコゲラ：キツツキ類中最小。主として低山帯の森林中に生息。

ヒバリ科

ヒバリ：日本全国の草原や畑地に生息。北海道、本州、四国、九州で繁殖。

モズ科

モズ：各地に極めて普通の鳥。昆虫やトカゲなどを樹木の棘にさしておく「モズノハヤニエ」の習性は有名

カワガラス科

カワガラス：全体黒色で尾は短い。山間の溪流に生息、水面を水平に飛ぶ。㊦

ヒタキ科

ウグイス：北海道、本州、四国、九州、老岐、対馬に分布。冬期、温暖な地方では市街地の庭園にも飛来する。

セツカ：小形の鳥で、夏羽は黄褐色と黒の縦斑、頭上は黒褐色で尾の先は白い。低地や山地の草原で繁殖。

シジュウカラ科

ヤマガラ：シジュウカラと同じ大きさで、体の下面が栗色。暖地の常緑広葉樹林に多い。

シジュウカラ：頭とどの漆黒と頬の白いのが目立つ活発な鳥。

低山地から平地にかけて繁殖。北海道、本州、四国、九州、壱岐、対馬に分布。

エナガ科

キユウシユウエナガ：極めて小さい鳥。白と黒の斑で、尾が著しく長い。秋から冬には人里にも来る。

メジロ科

メジロ：西南日本では留鳥として平地から低山地に生息し、秋期には人里近くにも飛来する。

ホオジロ科

ホオジロ：雄は顔が黒く、二条の白線が顕著。北海道、本州、伊豆七島、四国、九州、種子島、屋久島に分布。

アトリ科

カワラヒワ：飛翔時、翼の中広い黄色帯は極めて顕著。農耕地や集落地に普通で、冬期に大群をなす。本州、四国、九州、対馬、伊豆七島などに分布⑧

ハタオリドリ科

スズメ：留鳥として北海道以外の日本全土に分布繁殖。イネの害鳥。

ムクドリ科

ムクドリ：橙黄色の嘴が顕著。集落地付近の森林や公園、神社の森などに集団で営巣。冬期に大群で農耕地に下り害虫を捕食する。

カラス科

ハシブトガラス：嘴が大きい。

ハシボソガラス：ハシブトガラスに比べて小さくて、嘴が細い。

2 夏鳥

寒帯や温帯地方で繁殖する鳥が、気候の寒暖に従ってその棲む場所を変えることやそのような習性を渡りという。夏鳥は春に日本に渡ってきて繁殖して、気温の低下する秋になると南方の暖かい地方に移住する鳥たちである。

タカ科

サシバ：上面褐色の中型の鷹。本州、四国、九州で繁殖し、秋期に大群をなして九州南端から琉球列島を南下し、マレー諸島に渡る。

クイナ科

ヒクイナ：クイナとヒメクイナの中間大で、脚は赤色。沼地や水辺の草むらで繁殖。

バン：クイナより大型で、全体灰黒色。上嘴に続く前額の鮮紅色額板が顕著。各地の沼地や水辺で繁殖するものが多い。大部分のものは南方へ渡る⑧

フクロウ科

アオバズク：フクロウ科中もつとも普通な種類で、羽角はない。

黒褐色で、下面胸から腹にかけて白色の縦斑が顕著。夜間、活動し、ふた声ずつなく。

キユウシユウフクロウ：大型のフクロウで、羽角はない。里近くに住む普通種。

カワセミ科

アカシヨウビン：全体赤褐色。他のカワセミ類と異なり密林中に生息することが多い。冬期は台湾、中国南部、フィリピン等に渡る。

ツバメ科

ツバメ：各地の人家の軒で繁殖する。冬期はインド、インドシナ半島、マレー諸島、オーストラリア北部等で越冬するが、少数は日本で越冬する。

コシアカツバメ：ツバメよりやや大きい。腰が赤褐色で、下面に黒褐色の縦斑がある。

イワツバメ：ツバメより小さくて腰は白く、尾は短い。北海道、本州、九州で繁殖し、冬期は中国南部やマレー諸島等で越冬する。

3 冬鳥

冬鳥は夏鳥とは逆に、気温が低下する秋に飛来して越冬、翌年春に暖かくなると繁殖地に帰る鳥たちである。冬鳥たちは子育てを北

国でやって日本にいる間に繁殖することはない。しかし、タンチョウなどのように北国への渡りを止めて日本で繁殖するようになった鳥もいる。

ガンカモ科

マガモ：雄は頭頸部は金属緑色で白色の頸輪がある。アヒルは本種をもとに作り出されたものである。シベリア大陸から渡来するが一部はわが国でも繁殖する。⊗

コガモ：最も小形の鴨で、シベリア大陸から渡来する。雄の肩羽の外側が白く、体の中央に白い水平の線に見える。⊗

カルガモ：マガモのメスに似てやや小型。東亜に限られて分布。本州中部以南では冬期も多数滞留する。⊗

ワシタカ科

ツミ：ハイタカにて小形。全国の平地から低山地で繁殖し、冬期はマレー諸島やインドシナ半島に渡来するが、わが国に残留するものもいる。

ハイタカ：オオタカに似て雄はハト大。上面は灰青色、下面の横斑は赤錆色。冬期は平地や市街地でも見られる。

キジ科

ウズラ：キジ科中最小。シベリア南部、中国、モンゴル、朝鮮で繁殖し、冬期は台湾、中国南部、インドシナ半島等に渡来する。

ハト科

アオバト：緑色で、美麗。わが国特有の種類で、冬期は近畿、四国、九州の常緑樹林に多い。

セキレイ科

キセキレイ：背面石板色で下面黄色。北海道、本州、四国、九州で繁殖し、冬期は南方の離島に渡る。㊦
ハクセキレイ：顔白色。北海道や本州北部で繁殖、冬期は本州以南から台湾、中国沿岸まで渡る。

ビンズイ：背は暗緑褐色で黒褐色の縦斑がある。北海道、本州、四国で繁殖し、冬期は伊豆七島、九州、対馬やフィリピン、インドシナ半島にも渡る。㊦

タヒバリ：冬羽は頭上や背は暗色で縦斑は不明瞭。東部シベリア、カムチャツカ、千島で繁殖し、冬期、日本各地に飛来する。㊦

レンジャク科

ヒレンジャク：尾の先端は鮮紅色。シベリア東南部で繁殖し、北海道、本州、八丈島、四国、九州、対馬に渡る。

ヒタキ科

ジョウビタキ：胸から下は美しい栗茶色で、翼の白紋が目立つ。

シベリア南部、中国北部、朝鮮等で繁殖。

トラツグミ：ツグミ類中最大。褐黄色に黒斑があり美麗。冬期は暖地に漂行し、台湾、中国南部、マレー諸島、インドシナ半島等に渡る。

アカハラ：雄は上面、顔、喉は暗緑褐色で、胸と腹側は美しい狐色。冬期は西南日本に漂行し、一部は琉球、台湾、中国南部、フィリピン等に渡る。

シロハラ：暗緑褐色をした地味な鳥。ウスリー河流域や中国東北部等で繁殖し、わが国各地で越冬する。

ツグミ：上面は黒褐色と赤褐色の斑で尾は黒。黄白色の顕著な眉

斑がある。シベリア東南部やウスリー、カムチャツカ等で繁殖し、わが国に渡来し、中国南部やインド北部に渡るものもいる。
セツカ：黄褐色をした小形の鳥で割りに尾が長い。冬期は温暖な地方に漂行し、四国、九州、南西諸島等に周年生息する。

ホオジロ科

ミヤマホオジロ：顔は黒く、眉斑と喉が鮮黄色。東部シベリアで繁殖し、冬期わが国に渡来する。

アオジ：背面は暗緑色で下面は黄色。北海道や中部以北で繁殖し、冬期四国、九州、南西諸島等に渡来する。

4 旅鳥

旅鳥は夏鳥や冬鳥よりもっと長い旅をする鳥たちである。北方で繁殖して南方で越冬する長い旅路の途中、日本に立ち寄って翼を休めたり、餌を求めたりしている。日本は繁殖地でもなければ越冬地でもないが、北上と南下する春秋の二季に日本各地に現れる鳥たちである。

サギ科

アマサギ：夏羽は頭頸部と背の橙黄色が顕著。冬羽は白色で、嘴は黄色。

ダイサギ：白サギ類中最大で全身白色。

コサギ：白サギ中最小。全身白色で、嘴は長くて黒い。㊦

カッコウ科

ホトトギス：雄はアツペンカケタカのなき声が顕著。北海道、本

州、伊豆七島、四国、九州で繁殖。

鳥類については、参考文献に基き、郡山町において見られるのではないかと思われる種類について、鮫島正道の教示を得てまとめたもので、確認記録によるものではない。

【参考文献】

迫静男「薩摩半島西部の鳥類」：『鹿児島県自然愛護協会報告』、一九七四年

『鹿児島県の野鳥』：鹿児島県、一九八七年

第三節 爬虫類

イシガメ科

イシガメ：日本の固有種で、本州、四国、九州及びこれらの属島に分布している。淡水性で、動物質も植物質も食する。五〜八月頃水辺の土中に産卵する。

スッポン科

スッポン：本州、四国、九州および種子島に分布する。淡水性で、底が砂泥質の河川や池を好み、主として肉食五〜七月頃産卵する。各地で養殖されている。㊦

トカゲ科

トカゲ：背面は褐色または暗褐色。日本の固有種で、北海道、本

州、四国、九州、大隅諸島などに分布する。

カナヘビ科

カナヘビ：背面は褐色または暗灰褐色。日本列島の固有種で、北海道、本州、四国、九州、大隅諸島などに分布し、平地や低山地の草むらなどを好む。

ヘビ科

シマヘビ：体の背面は緑色がかつた黄褐色または褐色。日本列島の固有種で、北海道、本州、四国、九州、大隅諸島などに分布し、平地や山地に普通。

ジムグリ：背面は淡黄褐色または緑色がかつた淡褐色で、小さい黒斑を散布する。日本列島の固有種で、北海道、本州、四国、九州、大隅諸島に分布する。

アオダイショウ：褐色を帯びた濃いオリーブ色をしている。北海道、本州、四国、九州に分布する。日本内地産では最大となり、悪臭がある。

シロマダラ：背面は淡灰褐色または灰褐色で、黒褐色の横帯がある。日本の固有種で、本州、四国、九州に分布している。

ヒバカリ：背面は褐色または暗灰褐色をしている。本州、四国、九州、朝鮮、沿海州などに分布し、低山地の林内に生息している。

ヤマカガシ：体色の基色は緑色を帯びた褐色か暗褐色であるが変異が極めて多い。日本本土で最も普通なヘビの一種で、本州、四国、九州、朝鮮半島、中国などに分布している。㊦

クサリヘビ科

マムシ：体色はふつうは背面が灰褐色や暗褐色で、黒褐色の大きい斑紋をそなえているが、変異が非常に多い。琉球列島を除く日本の全土、シベリアからヨーロッパ東部まで分布する。

第四節 両生類

イモリ科

イモリ：体形にも体色にも変異が多い。背面は黒色または黒褐色稀に赤褐色。腹面は赤くて不規則な黒斑があるのが普通。日本本土の固有亜種で本州、四国、九州、大隅諸島などに分布。池や水溜りなどの止水水草に一個ずつ産卵する。

ヒキガエル科

ヒキガエル：体色は普通は背面が黄褐色、褐色または暗褐色で、腹面は淡黄褐色。本州、四国、九州、大隅諸島に分布。池、水溜り、水田などの止水に産卵。

アマガエル科

アマガエル：体色は背面は緑色または黄緑色で、暗緑色または黒褐色の不規則な斑紋をそなえていることが多い。体色を変える能力が著しい。

アカガエル科

ニホンアカガエル：背面は褐色または赤褐色で、少数の黒っぽい斑点を散在していることが多い。日本固有の亜種で、本州、四国、九州、及び大隅諸島に分布。主として平地や丘陵地に多く、水溜りなどに産卵。

トノサマガエル：各地で最も普通に見られるカエルの一つで、本州の大部分、四国、九州、大隅諸島、朝鮮、中国などに分布し、水田などの止水に卵塊を産卵する。

ヌマガエル：体の背面は褐色か暗赤褐色で、黒褐色の不規則な斑紋を散布している。中部地方以西の本州、四国、九州および琉球列島に分布し、平地の水辺に多い。

ツチガエル：体の背面は暗褐色または灰色がかった暗赤褐色で、不規則な黒い斑紋を散布している。本州、四国、九州、種子島、屋久島、対馬、朝鮮などに分布。池や水溜りなどの水草に卵塊を産卵する。

ウシガエル：背面は黄緑色、緑色または褐色で褐色の不規則な斑紋がある。アメリカ東南部の原産で、食用として移入されたもの。池や沼地に多く、本州、四国、九州などで繁殖している。

アオガエル科

カジカガエル：背面は暗灰褐色、固体によって緑色がかったものもある。日本本土の固有種で、本州、四国、九州に分布し、主として山地の溪流に生息。フイーヨフイーヨと美しく鳴く。㊦
シユレーゲルアオガエル：背面は緑色または暗緑色で、アマガエルによく似ている。日本の固有種で、本州、四国、九州に分布し、主として平地や丘陵地に生息している。㊧

第五節 魚類・貝類

1 魚類

郡山町は海洋に面していない内陸町である。したがって魚類としては淡水魚類しか生息していない。郡山町内を流れる甲突川水系や神之川水系には次のような種類の生息が知られている。

コイ科

オイカワ[㊦]

カワムツ (「アカヒラ」:雄のこと)[㊦]

タカハヤ (アブラメ・ブラミ・ボツ)[㊦]

カマツカ

コイ

ギンブナ[㊦]

メダカ科

メダカ

ドジョウ科

ドジョウ

ウナギ科

ウナギ

ギギ科

アリアケギバチ (ゲギユ)[㊦]

その他、外来魚として一九七〇年以降、カの防除のため放流されたタツプミノーやグツピー、ブラックバス、ブルーギル、ナイルテラピアなどの生息状況等については不明な点が多い。

2 貝類

シジミ科

マシジミ、ヤマトシジミ

イシガイ科

マツカサガイ

カワニナ科

カワニナ[㊦]

モノアラガイ科

ヒメモノアラガイ

(水産貝類については、行田義三の資料と教示を得てまとめた)

3 エビ・カニ類

ヌマエビ科

ミナミヌマエビ

テナガエビ科

スジエビ

ミナミテナガエビ[㊦]

ヤマトテナガエビ

イワガニ科

モクズガニ[㊦]

第六節 昆虫

1 蝶類（十食草・食虫）

セセリチョウ科

- ダイミョウセセリ：ヤマノイモ科の植物
 - アオバセセリ：アワブキ科の植物
 - ヒメキマダラセセリ：チヂミザサ
 - コチャバナセセリ：メダケやクマザサなど
 - オオチャバナセセリ：メダケやクマザサなど
 - イチモンジセセリ：ススキやチガヤなどのイネ科植物⑧
 - クロセセリ：ハナミョウガなどのシヨウガ科の植物
 - ホソバセセリ：ススキ
 - ミヤマチャバナセセリ：ススキ
 - ミヤマセセリ：クヌギやコナラなど
- ## アゲハチョウ科
- ジャコウアゲハ：ウマノスズクサ科植物
 - ミカドアゲハ：オガタマノキやタイサンボク
 - アオスジアゲハ：クスノキ、タブノキなどクス科植物
 - キアゲハ：ニンジンやセリなどセリ化植物
 - ナミアゲハ：ミカン科植物
 - モンキアゲハ：ミカン科植物
 - クロアゲハ：ミカン科植物
 - ナガサキアゲハ：ミカン科植物
 - カラスアゲハ：ミカン科植物
 - ミヤマカラスアゲハ：ミカン科植物

シロチョウ科

- モンキチョウ：ミヤコグサやウマゴヤシなどマメ科植物
 - ウスキシロチョウ：ハブソウ
 - キチョウ：ネムノキやメドハギなど
 - ツマグロキチョウ：クサネムやカワラケツメイなど
 - モンシロチョウ：アブラナ科植物
 - スジグロシロチョウ：ダイコンやハクサイなど
 - ツマキチョウ：イヌガラシやタネツケバナなど
- ## シジミチョウ科
- ムラサキシジミ：コナラ、アラカシ、クヌギなど⑧
 - ムラサキツバメ：マテバシイやシリブカガシ
 - トラフシジミ：フジ、ウツギ、ノイバラなど
 - カラスシジミ：ハルニレ
 - ベニシジミ：ギシギシ、スイバなど
 - ゴイシシジミ：タケノアブラムシ（わが国唯一の食虫性）
 - ウラナミシジミ：ソラマメやアズキなど
 - ヤマトシジミ：カタバミ
 - ルリシジミ：ハギやニセアカシア、フジなど
 - サツマシジミ：ハイノキ科、スイカズラ科、バラ科など
 - ヤクシマルリシジミ：ムクロジ科
 - ツバメシジミ：メドハギ、コマツナギなどマメ科植物
 - タイワンツバメシジミ：マメ科植物
 - ウラギンシジミ：フジ、クズ、クララなど
 - クリシマミドリシジミ：アカガシ

マダラチヨウ科

アサギマダラ：キジヨラン、カモメズル[㊦]
カバマダラ：(迷蝶) ガガイモ科植物
スジグロカバマダラ：(迷蝶) ガガイモ科植物
タテハチヨウ科

ウラギンスジヒヨウモン：タチツボスミレなど

オオウラギンスジヒヨウモン：スミレ科植物

ミドリヒヨウモン：スミレ科植物

クモガタヒヨウモン：スミレ科植物

メスグロヒヨウモン：スミレ科植物

ウラギンヒヨウモン：スミレ科植物

オオウラギンヒヨウモン：スミレ科植物

ツماغロヒヨウモン：スミレ科植物

イチモンジチヨウ：スイカズラ科植物

コムスジ：タンキリマメ、ニセアカシア、ナツフジなど

キタテハ：カナムグラ

ヒメアカタテハ：ゴボウ、ダイズ、ハハコグサなど

アカタテハ：イラクサ、ヤブマオ、カナムグラなど

ルリタテハ：サルトリイバラ、オニユリなど

イシガキチヨウ：イヌビワ、イタビカズラなど

スミナガシ：アワブキ、ヤマビワなど

ゴマダラチヨウ：エノキ

タテハモドキ：キツネノマゴ科植物

アオタテハモドキ：(迷蝶) キツネノマゴ科植物

メスアカムラサキ：(迷蝶) スベリヒユ

リュウキユウムラサキ：(迷蝶) サツマイモ、スベリヒユなど

ジャノメチヨウ科

ヒメウラナミジャノメ：チヂミザサやシバ

ウラナミジャノメ：メヒシバ

クロヒカゲ：メダケ、ゴキダケ

コジャノメ：チヂミザサ

ヒメジャノメ：メヒシバ、スズメノヒエ、チヂミザサ

キマダラヒカゲ：メダケやササ類

ウスイロコノマチヨウ：トウモロコシ、ススキ、イネ

クロコノマチヨウ：ススキ、ジユズダマ、アワなど

2 甲虫類

クワガタムシ科

ミヤマクワガタ、ノコギリクワガタ、コクワガタ、ヒラタクワガ

タ、ネブトクワガタ

コガネムシ科

アオドウガネ、アオハナムグリ、アカビロウドコガネ、アシナガ

コガネ、ウスチャコガネ、オオカンシヨコガネ、オオクロコガネ、

オオコフキコガネ、カドマルエンマコガネ、カナブン、カブトム

シ、クロカナブン、コアオハナムグリ、コイチャコガネ、コガネ

ムシ、サクラコガネ、サツマコフキコガネ、シロテンハナムグリ、

セマダラコガネ、ハナムグリ、ヒメアシナガコガネ、ビロウドコ

ガネ、マメコガネ、ドウガネブイブイ、ヒメコガネ、

ハンミョウ科

ハラビロハンミョウ、カワラハンミョウ、ハンミョウ、ルイスハンミョウ、コニワハンミョウ

ホタル科

ゲンジボタル[㊦]、ヘイケボタル

カミキリムシ科

ベーツヒラタカミキリ、ウスバカミキリ、ノコギリカミキリ、クロカミキリ、ツヤケナシハナカミキリ、クロハナカミキリ、ヤツボシハナカミキリ、アオスジカミキリ、キマダラカミキリ、トビイロカミキリ、トラカミキリ、タケトラカミキリ、エグリトラカミキリ、ヨスジトラカミキリ、ベニカミキリ、ゴマダラカミキリ、ホシベニカミキリ、ヤハズカミキリ、センノカミキリ、シロスジカミキリ、ゴマフカミキリ、ナガゴマフカミキリ、クロサビアヤカミキリ、ハイイロヤハズカミキリ、アトジロサビカミキリ、ラミーカミキリ、リンゴカミキリ、ヒメスギカミキリ

水棲甲虫類

コガラシミズムシ、ヒョウゴコガラシミズムシ、コツブゲンゴロウ、ムツボシツヤコツブゲンゴロウ、チビゲンゴロウ、コウベツブゲンゴロウ、アヤナミツブゲンゴロウ、マメゲンゴロウ、ヒメゲンゴロウ、ハイイロゲンゴロウ、コシマゲンゴロウ、コガタノゲンゴロウ[㊦]、オオミズスマシ、コミズスマシ、キイロヒラタガムシ、ヒメガムシ、タマガムシ、トゲバゴマフガムシ、ヤマトゴマフガムシ

3 セミ類

ニイニイゼミ、クマゼミ、アブラゼミ、ハルゼミ、ヒグラシ、ミンミンゼミ、ツクツクボウシ

4 トンボ類

イトトンボ科

コフキヒメイトトンボ、ホソミイトトンボ、キイトトンボ、リュウキユウベニイトトンボ、アオモンイトトンボ、アジアイトトンボ、クロイトトンボ、ムスジイトトンボ、オオイトトンボ

モノサシトンボ科

モノサシトンボ

アオイトトンボ科

オオアオイトトンボ、ホソミオツネイトトンボ

カワトンボ科

ハグロトンボ、ミヤマカワトンボ、ニシカワトンボ

サナエトンボ科

ヤマサナエ、キイロサナエ、オグマサナエ、ダビドサナエ、ウチワヤンマ、タイワンウチワヤンマ

オニヤンマ科

オニヤンマ

ヤンマ科

サラサヤンマ、ミルンヤンマ、カトリヤンマ、ヤブヤンマ、マル
タンヤンマ、ギンヤンマ[㊦]、クロスジギンヤンマ

エゾトンボ科

コヤマトンボ、オオヤマトンボ、タカネトンボ、トラフトンボ
トンボ科

ハラビロトンボ、オオハラビロトンボ、シオカラトンボ、ハラボ
ソトンボ、シオヤトンボ、オオシオカラトンボ、ヨツボシトンボ、
ベッコウトンボ、ハツチヨウトンボ、アオビタイトンボ、コフキ
トンボ、シヨウジョウトンボ、アキアカネ、マユタテアカネ、マ
イコアカネ、ヒメアカネ、ミヤマアカネ、ノシメトンボ、コノシ
メトンボ、リスアカネ、キトンボ、ベニトンボ、コシアキトンボ、
チヨウトンボ、ハネビロトンボ、ウスバキトンボ

迷トンボとしてオキギンヤンマやアメイロトンボなどが南方か
らの飛来種として記録されている。

5 バッタ・コオロギ類

ノミバッタ科

ノミバッタ

ヒシバッタ科

ハネナガヒシバッタ、トゲヒシバッタ、ヒシバッタ

バッタ科

オンブバッタ、シヨウリヨウバッタ、シヨウリヨウバッタモドキ、
マダラバッタ、クルマバッタ、ヒナバッタ、トノサマバッタ、イ

ボバッタ、ツチイナゴ、ハネナガイナゴ、ツマガロイナゴモドキ、
ナキイナゴ

コオロギ科

エンマコオロギ、タイワンエンマコオロギ、ミツカドコオロギ、
ナツノツツレサセコオロギ、ツツレサセコオロギ、タンボコオロ
ギ、クマコオロギ、クチキコオロギ、マダラスズ、ニゲシロスズ、
シバズ、ヤチズ、ヒメズ、クサヒバリ、ヤマトヒバリ、ク
ロヒバリモドキ、カヤヒバリ、カネタタキ、カヤコオロギ、クマ
スズムシ、マツムシ、スズムシ、ヒロバネカントン、ヒメコオロ
ギ

ケラ科

ケラ

カマドウマ科

マダラカマドウマ、クラズミウマ、オオカマドウマ

コロギス科

ハネナシコロギス、コロギス、コバネコロギス

キリギリス科

ハヤシノウマオイ、ヤブキリ、キリギリス、ヒメギス、クサキリ、
クビキリギリス、カヤキリ、シブイロカヤキリモドキ、サトクダ
マキモドキ、ツユムシ、セスジツユムシ、クツワムシ、ウスイロ
ササキリ、ホシササキリ、オナガササキリ、ヒメクダマキモドキ

昆虫については、参考文献の他、福田晴夫、山下秋厚、成見和聰
の教示を得てまとめた。

この章の写真はすべて『川の生き物図鑑』鹿児島県の自然を記録する会編、平成一四年、南方新社

【参考文献】

〈昆虫〉

『さつま』鹿児島県昆虫同好会機関誌

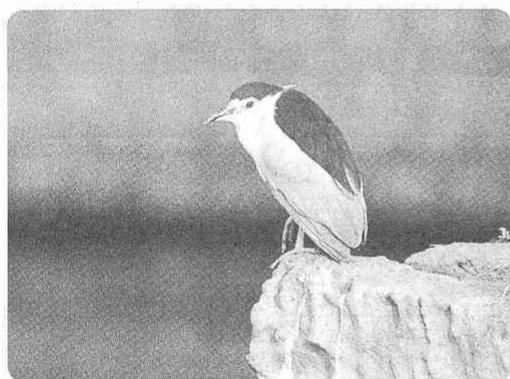
「鹿児島と世界の大昆虫展」鹿児島県立博物館、一九九四年



ホンドカヤネズミ (の巣)



ニホンイノシシ



ゴイサギ



ヤマセミ



カワセミ



カワガラス



カワラヒワ



コサギ



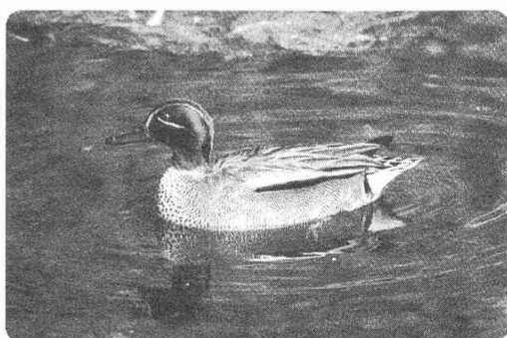
アオサギ



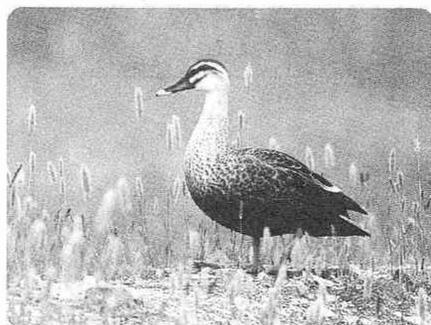
パン



マガモ



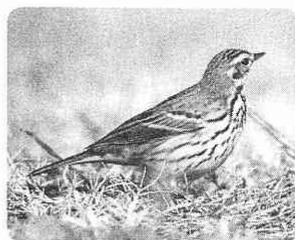
コガモ



カルガモ



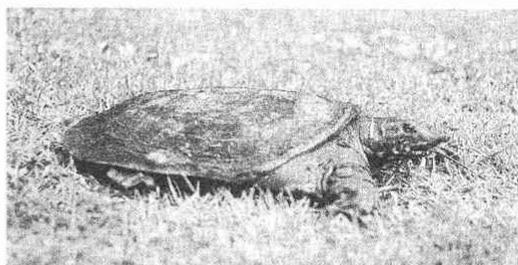
キセキレイ



ビンズイ



タヒバリ



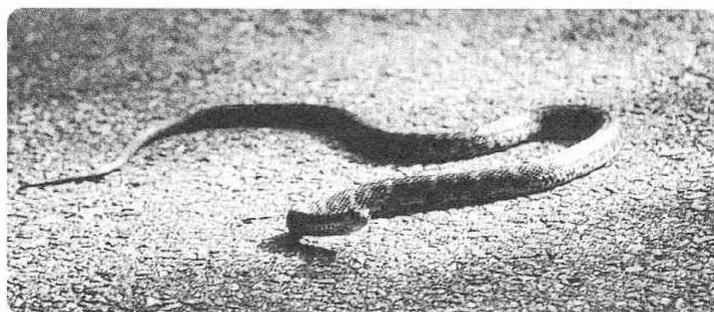
スッポン



シュレーゲルアオガエル



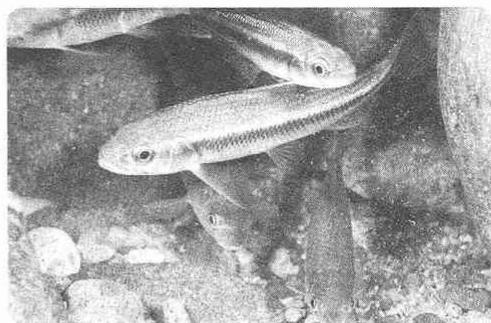
カジカガエル



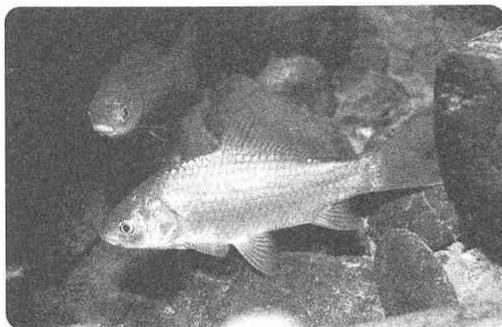
ヤマカガシ



オイカワ



カワムツ



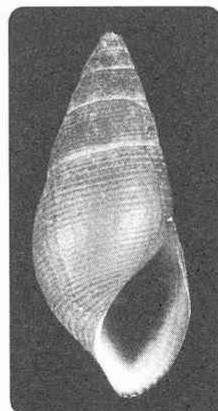
ギンブナ



タカハヤ



アリアケギバチ



カワニナ



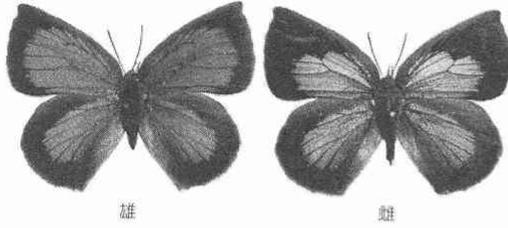
ミナミテナガエビ



モクズガニ



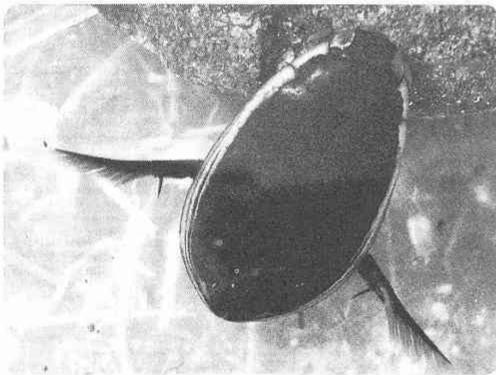
イチモンジセセリ



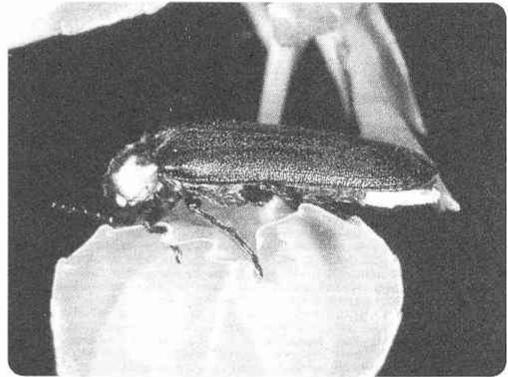
ムラサキシジミ



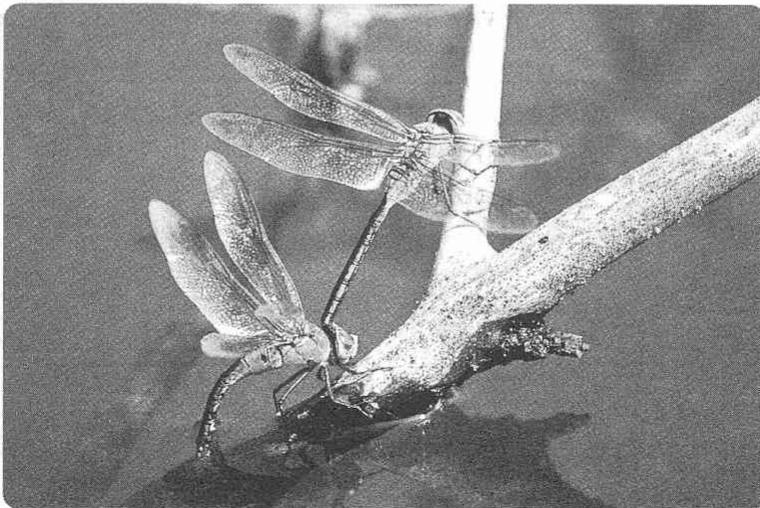
アサギマダラ



コガタノゲンゴロウ



ゲンジボタル



ギンヤンマ

